

# 共同募金・社会課題解決プロジェクトに参加しています!

ピピオ子どもセンターは、今年度も広島県共同募金会が実施している社会課題解決プロジェクトに参加しています。同封しております郵便局の振込用紙を利用して、広島県共同募金会に募金して頂くと、広島県共同募金会からピピオ子どもセンターに助成金を頂くことができます。実施期間は、平成27年1月から3月末までです。広島県共同募金会の社会課題解決プロジェクトの詳細については、広島県共同募金会のホームページ(<http://www5.ocn.ne.jp/~kyobo34/>)をご参照ください。継続的な子どもたちへの支援を行っていくために、引き続きご支援をお願いいたします。

## ～ピピオからのお知らせ掲示板～

### ● 寄付等のご協力ありがとうございました

東様、国際ソロプチミスト広島-もみじ様、コストコホールセールジャパン(株)様、高桑様など多数の方々から寄付(金銭、食品、生活用品など)を頂いております。日々の子どもたちの生活やより充実した自立支援のために活用させていただきます。この場をお借りして御礼申し上げます。

### ● 生活用品の募集をしています

ピピオ子どもセンターでは、ピピオの家から巣立つ子どもたちへの生活用品(家具家電含む)等の提供を行っており、今後は、自立援助ホームから巣立っていく子どもたちにも提供していきたいと考えています。皆様のお手元にあります、使われていない生活用品等をご提供頂ければ幸いです。

### 平成26年12月末日時点の会員数

正会員 (個人)	93名	正会員 (団体)	4団体
賛助会員 (個人)	62名	賛助会員 (団体)	2団体

### 事務局雑記

○ピピオ子どもセンターは、多くのボランティアスタッフの方々に支えていただいています。12月からは「はばたけ荘」でも、子どもたちの食事づくりのお手伝いをお願いしています。食べ盛りで、仕事や学校で頑張ってきた子どもたちには、温かい食事が何よりの喜びになるようです。(3人で7合?平らげたとか・・・)

発行者 特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター 事務局  
〒730-0014 広島市中区上幟町2番36号 S・ウィングビル505号  
TEL: 082-221-9563 FAX: 082-555-3659

# ひなばと



～NPO法人ピピオ子どもセンター 会報～  
vol. 14

平成27年1月20日

## 子どもシェルター全国ネットワーク会議2014 in札幌に参加しました

子どもシェルター(自立準備ホームを含む。)を運営している全国の団体が、1年に1度、情報交換や直面している課題に対して、どのように取り組んでいくかという事を協議する「全国ネットワーク会議合宿」が、平成26年11月1日・2日にかけて、札幌で開催されました。

前回開催以降、札幌・和歌山で新たにシェルターが開設され、さらには、千葉、大分、新潟でも、シェルター開設予定であるとの報告を受けました。その他にも、全国で開設に向けた準備が進められているとのことであり、各都道府県に1つ以上のシェルター開設を目指して普及活動が徐々に広がっていると感じました。運営に関する会議では、暫定定員制度による措置費削減の問題について議論され、スタッフの会議では、ケース検討を行うなどして、今後、より一層の安定的な運営・子どもへの支援を目指していくための協議が行われました。

全国の同じ志を持った人たちとの繋がりを感じることができ、改めて子どもたちへの支援の重要性を意識することができた2日間でした。

砂本 啓介



### 暫定定員制度とは

児童入所施設(ピピオの家・はばたけ荘も含まれます)には、行政から、認可定員数に応じた費用(措置費等と言います)が支払われます。しかし、国が定める算式により、前年度の平均在籍人数に基づいて算定した数が、認可定員数より少ない場合は、これが「暫定定員」として定められ、措置費等は暫定定員数に応じた額となります。

例: 認可定員数が5人で、前年度平均在籍人数が2.5人のとき

国が定める算式で算定した数は3人<認可定員数5人 → 3人が「暫定定員」となり、措置費等は2人分減額されます。

※子どもシェルターでは新規入居者数が認可定員の2倍以上あった場合は暫定定員を定めません、特例が設けられています。

暫定定員が定められると、運営資金が不足し、施設等の安定的な運営が難しくなることがあります。

## 会員の皆様へのご挨拶～第14回～上野和子

2015年もピピオ子どもセンターをよろしくお願いいたします。

昨年、ピピオ子どもセンターの理事に就任いたしました、NPO法人ひろしまチャイルドライン子どもステーションの理事長をしております上野と申します。

皆様には、平素よりひろしまチャイルドライン事業におきましても大変お世話になっており、心より感謝いたしております。

ひろしまでチャイルドラインを開設して15年になります。18歳までの子ども達から、電話で話を聴いております。これまで、電話を受けた後、チャイルドラインの私たちが安心してお願いできる、子どもたちを受け入れてくれるところがあったなら……。という思いを持ち続けておりました。

そんな折に、弁護士先生たちが中心になって、子どもシェルターを立ち上げようとしていたことを耳にし、大変嬉しく、心強く思いました。これで、広島の子どもたちも、私たちに電話をかけた後、安心できる居場所が一つ増えたと感じたのは、私のみならず、子どもの支援をしている多くの皆さんが思われたことと思います。現実には、チャイルドラインからピピオの家につながったという話を聴き、「良かった！」と安堵したこともありました。

また、昨年9月に開設しましたはばたけ荘も、子どもたちの自立を見守りながら、温かい心通う生活空間にしていきたいと思っています。

子どもたちが安心して生き生きと暮らせる社会の実現を目指すうえでも、こうした要支援の子どもの存在が少なくなることが望まれる一方、まだまだ民間の支援がなくては成り立たない状況が続いています。子どもの現状を知れば知るほど、子どもが安心し、信頼できる大人を増やし、子どもの笑顔を増やしたいと思う今日この頃です。

ピピオ子どもセンターの理事としては新米の私ですが、皆さんと一緒に子どもたちに関わっていきたいと思っています。

ピピオの家、はばたけ荘ともども、微力な私ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

NPO法人ピピオ子どもセンター理事 上野 和子

## 子タン弁護士の声

昨年ピピオの家を巣立った子どもの「子ども担当弁護士（通称：子タン）」の声を紹介します。

子タン期間中、当初は方針もなかなか定まらず、また話が進まないことに子どもの不満が募り、子どもとの良い関係もなかなか築けないうえに、

そんな中、スタッフさんから「子どもは大人が何をしてくれたかをすごく良く見ている。そして、自分のために何かをしてくれる大人を、子どもは（必ずしも態度には表さないけれど、）感謝し、信頼するようになる。」という言葉をいただき、ふっきれた思いになり、ちょうどその頃から、子どもとの良い関係が築けるようになったのを覚えています。

ピピオの家退居時にスタッフさんへ宛てた手紙の中で、彼女は「多くの人に守ってもらって今の自分がある、自分と同じ境遇の子どもを救うために児童福祉司を目指している」と綴っていました。また、ピピオの家退居から数か月経過した今も、夢を叶えるために勉強を頑張っていること、充実した毎日を送っていることを聞き、当初とは別人のように成長したなあと胸が熱くなったりもしました。もとい、考えてみれば、もともとは素直で真面目な子だったところ、彼女の不満や不安が彼女をわがままにさせていただけなのかなという気もします。

私自身が彼女に対してできたことは些細なものだとは思いますが、それでも彼女が変わる様子を身近で見ることができ、非常にやりがいを感じました。



## ＝スタッフ通信 第7回＝

はばたけ荘スタッフのMです。元中学校（理科）教師。64才。

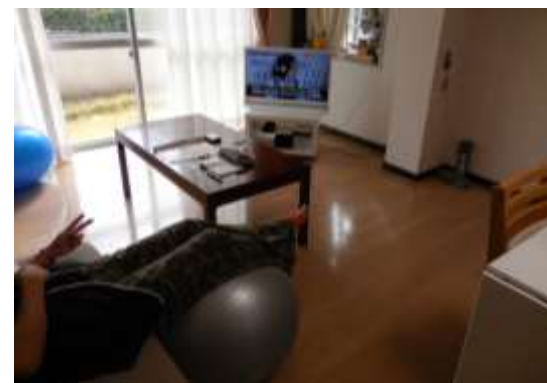
何かの縁に引かれるようにはばたけ荘のスタッフになった、と思っています。

退職時の卒業生に手相占いがよく当たるといふ女子生徒がいました（実際その噂を聞きつけ彼女の家を訪れる人が少なからずいたようです）。私もその彼女が卒業する直前、半分好奇心で「これから先わたしの人生如何に」と職員室の入り口で左の掌をその子の前に差し出しました。すると彼女は迷うことなく「65歳までに大病するけど先生の生きる意欲が強ければ乗り越えられますよ」に続けて「先生、しばらく好きなことをやった方がいいですよ。そうしているとやがてやる事が出てきますよ」と。最初の予言については、今のところ大病に罹っていないはずなのですが…。一度胆のうがんの疑いに肝を冷やしたことがあるのでそれがそれであろうと都合よく自分で解釈しています。

二番目の予言については、彼女の見立てに従ったわけではないのですが退職時は疲れ果てて干乾びた水苔の如くもはや絞り出そうにも一滴の水も、一言も出ない完全な空蟬状態で、結果的に彼女の予告通り、家事（これはまだ働き続けている妻からの柔らかい口調ながらも何か拒否できない雰囲気を感じたもので）以外は本当に気儘に好きなことだけしかできませんでした。まず始めたのがとにかく文字を取り戻さなければと天声人語の書き写し、そしてふと小学校のとき習っていた習字が懐かしくなり墨の香りに浸りながらの写経（これはわずか十数回でやめる。なにせ集中力が半端なく必要なもので…）、そして読む必要のない本をたっぷり時間をかけての読書、さらには翌日の疲労蓄積を気にしないでいいランニングと。周りの人は無聊だろうと気遣ってくれましたが当人は至って平気の自閉生活。

だが不思議なことにやがて外に関心が向かい始めます。人は充足すると自然と動き始めるようです。大学の聴講生になる。…。このころから「何かすること」がないかなあと思いはじめていました。

ある日帰宅すると、台所のテーブルの上にピピオ子どもセンターのパンフレットとメモが置いてありました。メモには「子どもと関わる」仕事に就いてみませんか。聞いたこともない名前の付いたパンフレットを読み、「ピピオ？」とインターネットで調べ、詳しいことはわからないが生半可な気持ちでは無理な仕事だなと思いつつ「何かすること」とは「これかな」と思う自分がいました。



はばたけ荘には、現在4人の男の子が入居しています。

このようになんまりどころこしい縁で私ははばたけ荘のスタッフになりました。スタッフになったからには、あの苦手な村瀬嘉代子さんの本を読まなければとすぐ思いました。そこにはこう書かれていました。「…クライアントが自分を受け入れ、居場所感覚を持てるようになる手助けをクライアントの状態、時と場に即応しながら行っていく…」。「クライアント」と書かれているのは勿論心理療法の本のためです。そして私が苦手なのは下線部分のようにその場に応じて瞬時に具体的に対応するのが下手なためです。が、それがわかっていてこの本を読んだところでそう簡単に苦手が克服されるわけではありません。ではと、カリヨン子どもセンターの人が書かれた本を見ると、スタッフの心構えの最初に「スタッフ自身が社会的でありたい」とある。「あなたが社会的か」と問われて「そうだ」と答える自信もありません…。とにかくよくわからないまま今すでにスタッフとして子ども達（勿論立派な少年です）に接しています。その子どもたちが、何年後かに、ここ「はばたけ荘」が羽ばたくためのエネルギーを蓄える巣だったと、ここで過ごした時間が無駄ではなかったと思える場所になってくれればよいが、と祈りながら。

つい先日、私が一方的に尊敬する中井久夫さんの本を何気なくめくると、そこには「サリバンは、その第二として『辺縁的な観念に意識を上らせること』を挙げているが、実際には、これは“虫の知らせ” hunch を無視しないことであると私は思う。私はしばしば『門の前まで行っていやな感じがしたら、さっさとやめて帰っておいで』と言って患者を新しい人生の試みに送り出した」と書かれていました。あまり理料的ではないけれど私はこういう世界が好きです。そう、私は今“直感”でやっています。



みんなよく食べます。冷蔵庫も大型です。